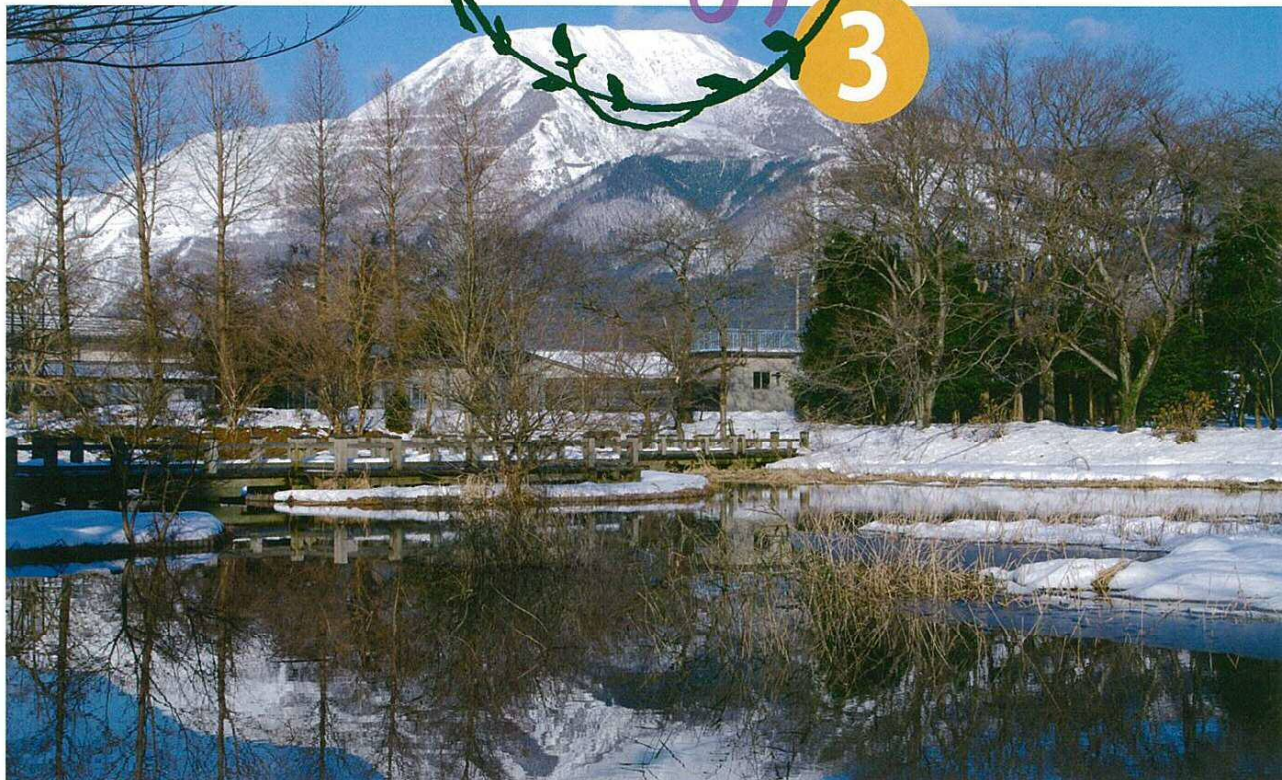


南無阿弥陀仏は
私のいのち



〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobihiro.jp/>
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



語り継がれる教え

もうすぐ春分の日を迎える。春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」という趣旨のもと制定されている。言い換えれば、普段私達は自然環境の中にいることを忘れていているのである。

ところで環境とは、自然界だけでなく人間関係も含まれる。私が今ここにいるのは、誰の力も借りずに自分の力でやってきたと、つい思い込むが、私が生まれてきたのは私の力でなく父と母がいたからである。当たり前のことではあるが、そのことを忘れてしまうのが私達の姿である。

祝日や記念日は、出来事を忘れないように願われた先人の知恵である。自然界の中に生きているということは誰もが知ってはいるが、なかなか感じられないことである。しかし、そういう私達に自然は時折猛威を振るう。その出来事の一つに、二年前に起きた東日本大震災がある。

震災の被害は甚大である。しかし、人々が自然の様々なはたらきの中で生きているということと、被害に遭つても懸命に立ち上がる人がいることを教えられた。三月十一日は沢山の教えを忘れないように、これから生まれてくる人へ語り継がれるであろう。語り継がれるのは、私達一人一人が関わりを持って生きている証である。

いつかは実家に

滋賀県在住 なかじま あつし 中嶋 篤 さん



◆都会へ
今回は、私の高校時代（滋賀県）の同級生で、情報システム会社勤務の中嶋篤さんにお話を伺います。

東京に来て丸十年経ったかな。会社に入社した時点で東京配属でした。就職する時は地元に近い大阪が良いなという気持ちもありつつ、IT業界に行くならやっぱり日本の中では最先端の東京に行きたかった。

なんとといっても滋賀で生まれて大学は鳥取やったから、一度は都会に行かなあかんやろうと思った。

◆僕の実家

長男だからなのか、この姓と土地を絶やしたくないという思いが、ここ最近強くある。四百年程同じ場所に中嶋家があるらしい。外で家庭を持ってもこの中嶋姓は残るけど、それだけではあまり意味はないかと思う。その土地で長く続いてきたからやっぱりそこで。

でも、きちんとした理由で実家を継ぐというよりは、都会で一生を終えたくないという気持ちがあるのかな。都会は都会で魅力的で好きなんだけどね。それは滋賀県で

生まれ育ったからかな。生まれ育ってきた場所が大事な場所というのを感じているから。

◆地元の営み

親は「田舎の変なしきたりは、お前の代ではしなくてもええ」と言う。僕も寄り合いとか、お寺の行事に目の効果を期待するわけでもないし、やっぱりこれをやって何の役に立つのかと思う。

でも、昔からそういう営みがあつたんやから、何かその営みを崩したらあかんっていうのはわかる。地元の営みが途絶えてしまうやろうし。そうになると、やっぱりそれはしないといけないと理由無く思う。みんながやってきた田舎の営みがあるからそう思う。中嶋家だけで生活してきたんじゃないって感じかな。そう思うと、改めて実家の大切さを考えなあかんと思うようになった。

（聞き手 大橋 伊知郎）



なんで？「お彼岸」

お彼岸は春分と秋分の日を中日とする一週間であり、日本独特の仏教行事であります。

彼岸は梵語であらわすと「波羅蜜多」といわれ、訳して「到彼岸」、すなわち浄土を意味します。浄土を彼岸というのに対し、娑婆（この世）を此岸といいます。

春分・秋分の日、太陽が真東から真西に沈むことから、西方十万億土にある浄土を願うということがお彼岸と結びつき、そのことから浄土へ往生された先祖の供養としてお墓参りが習慣となりました。

お彼岸は亡き人のご縁をいただき、私が仏法に遇わせてもらう大切な仏事です。ですから真宗ではお彼岸を勤める期間を「聞法週間」として、われひと共にお念仏のみ教えを聴聞してきたのです。

（木村 専正 記）



ここにいる「凡聖」は、「欲もおおく、
いかり、はらだち、そねみ、ねたむこ
ころ」のままに迷走する「凡夫」と、そ
うしたところを覚った徳のある「聖
者」のことです。しかし、聖者といつて
も、善導大師によれば、ご縁が違っ
ただけで、凡夫なのだと いわれます。ま
た「逆謗」というのは、人の道にはず
れて仏道に逆らう「五逆」の人と、仏
法を謗る「謗法」の人のことです。五
逆は、父を殺す、母を殺す、修行者を
殺す、仏身を傷つける、教団を破壊
するの五つですが、身でする殺生・
偷盗・邪淫、口でする妄語・綺語・
悪口・両舌、心で思う貪欲・瞋恚・
愚痴の十悪を入れることもあります。
いずれにしても、「サンガラス 実
は心に かけてるの」という自分を
かえりみれば、凡夫であると思ってい
る自分に、五逆である姿が教えられ
ます。そしてそのことに気づいても、
欲をおこし腹を立てるのは、凡夫だ
から仕方がない、それは聖人も先生
も同じだと人を巻き込んで済ませて
いくのは、自分の本心に背いているの
であって、その姿勢は謗法の者と教え
られるのであります。若い頃、「君ら
は、箸にも棒にもかからん者」といつ

も、箸にはかからんが棒にはかかる
と思っているだろう。だから仏法が
聞こえないのだ」と教えられたこと
が思い合われます。

そのようなわたしが「凡・聖・逆・



正信偈の話⑬ 松井憲一
凡聖逆謗齊回入 如衆水入海一味
(凡聖、逆謗、齊しく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるが如し。)

うところまで追い込まれて、自分中
心の心を翻すのを「回入」、回心して
教えに帰入するといわれます。「酒代
を とやかく言うな 化粧代」と自
己肯定と自己弁護にあげられるわ
たしに回入のご縁
をいただくのは、
阿弥陀仏の本願
(第十八願)とそ
の本願成就の文に、
「唯五逆と誹謗正
法とを除く」、つま
り「五逆と誹謗の
者」は救えないと
いわれるからであ
ります。それは、
「除く」とまでいつ
て私の在り方を知
らしめ、回入せし
めようという本
願のまごころなの
であります。

だから、親鸞聖

人は、「唯除」というのは、ただのぞくと
いうことばなり。五逆のつみびとを
きらい、誹謗のおもきとがをしらせ
んとなり。このふたつのつみのおもき
ことをしめして、十方一切の衆生み

なもれず往生すべし、としらせんと
なり。(『尊号真像銘文』)といわれ
ます。つまり、五逆謗法の者と知らせ
て、翻えさせるのが本願の大悲心で
あつて、五逆や謗法を除かないため
なのです。「五逆のつみびとをきらい、
誹謗のおもきとがをしらせ」ること
が、そのまま「十方一切の衆生みなも
れず往生すべし」と知らせる、救いよ
うのない者を救う、本願の叫びであ
ったのです。

それで、阿弥陀仏の本願に値遇す
れば、みなもれず往生することを譬
えて、「衆水、海に入りて一味なるが
如し」といわれます。それは、どのよ
うに綺麗な川の水であろうと、汚れ
きつた水であろうと、紆余曲折をし
てきた流れであろうと、海に入れば
みな同じ塩味になるように、人はみ
な海のような一味平等の本願のお心
に救われるのです。

本願にふれて、水のように冷たい
頑な自分に出遇う、その翻りに開か
れるのが、凡夫も聖者も五逆者も謗
法者も区別のない、同じ仏弟子の世
界であります。海のような本願は、
あらゆる人をみな兄弟として、御同
朋、御同行、御坊と拝み、受けとつて
いける法の世界を賜るのです。

山門の言葉

これが生これずれば彼が生かれじ、
此が滅すれば、彼が滅す

釈尊は、生・老・病・死の四苦を知り、その苦を克服するために、家を棄て、国を捨て、修行に六年間を費やした。しかし修行が挫折したときに、苦悩する我が身が、循環する命の連鎖の中に、支えられていたことに気づく。それは「縁起」の発見であった。

その発見を、児玉暁洋師は「私は、かつて牛であり、草であり、大地であった」と表現される。苦行によつて奪われた体力は、一杯の乳粥ちちがゆによつて回復した。その乳は牛によつてもたらされ、牛は草を食はんで乳を出いだす、草は大地に萌もえ出いる、その大地には牛の糞がある。命の循環がそこにある。

そして「此があれば彼があり、此がなければ彼がない。此が生ずれば彼が生じ、此が滅すれば、彼が滅す」(小部經典「自説経」)という法則の発見となる。

しかし「私の悟った縁起の法は、甚深微妙にして一般の人々の知り難く悟り難いものである」(南伝大蔵経)

との思いから、しばらくこの法則を伝えることを躊躇するが、同時にこの法則によつて、釈尊自らが抱いていた苦悩は、実は個人的なものではなかったと知らされるのである。釈尊の一生を貫く、伝道の旅が始まった。

縁起とは「因縁生起」の略で、原因と外的条件Ⅱ縁によつて結果が生じるという仏教の基本的な法則であり、あらゆるものは直接にも間接にも何らかのかたちでそれぞれ関わり合つて生滅変化しているという考え方である。

「生があるから、病む、老いる、死ぬ」のであつて、「生がないならば、老も病も死もない」のである。

釈尊は縁起について「わが作るところにも非ず、また余人の作るところにも非ず。如来の世に出ずるも出てざるも法界常住なり」とも述べ、縁起はこの世の自然の法則であり、自らはそれを識知しただけであると明言される。

(岸本 秀一 記)

おつとめ

仏説無量寿経 ④

法蔵菩薩は世自在王仏との出会いによつて、二百四十億の諸仏の国土をご覧になり、どのような人も必ずたすけ遂げるという誓願(四十八願)を建てられました。

人間は平和な世界を願いながらも、この世に戦争が無くなることはありませんでした。平和を祈ると叫びながら軍事兵器を造り続け、正義という名の下に、危害を加える国に対しては徹底的に攻撃を繰り返します。まさに人類の歴史とは争いの歴史であり、互いの利益を最優先として傷つけ合ってきたのが人間の現実です。法蔵菩薩は、どこまでも自我の心で生きる私たちを深く悲しみ、自害被害(自ら傷つけ、他を傷つけていく、迷いの生き方)をどうしたら超えてゆけるのかということに応える国として、浄土を建立されたのです。

(木村 専正 記)

日誌

- 1月19日 定例聞法会
 1月20日 企画委員会
 評議員会新年会
 1月22日 仏教青年会「歎異抄」に聞く(第84回)
 講師 宗 正元師
 1月23日 責任役員会・総代会
 1月24日 教行信証「信巻」に聞く
 講師 宗 正元師
 1月26日 混声合唱団「エコー」練習
 同行会新年会(18名参加)
 1月27日・28日 宗祖忌
 1月28日 教区研修会
 (長安寺 住職・坊守・山崎参加)
 1月31日 教区新年会(住職・坊守参加)
 2月2日 混声合唱団「エコー」練習・
 新年会(喫茶「汀」)
 2月7日・8日 中興忌
 2月10日 城東ブロック会聞法会
 (市川 八幡神社 参加者23名)

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
 ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

墨田区	神谷 和利 様	品川区	大谷 はま子 様
世田谷区	山上 ミツ 様	さいたま市	井上 實 様
中央区	今井 和彦 様	江東区	坂口 実祥 様
北区	小山 幹夫 様	台東区	加藤 銈一郎 様

お墓のはなし「手桶」

お墓参りの際、「西徳寺」の手桶をご利用していただいておりますが、ご希望であれば名前と家紋入りの専用の手桶をお作りすることが出来ます。

プラスチック製と木製の二種類あります。しかし木は乾燥するとタガが外れるなど、手入れが面倒なため、主流は木目調のプラスチックになっております。置き場は墓地の入口に棚が設置しており、そこをお使い頂いておりますが、置く場所が不足しているのが現状です。そのため、一対(二つ)希望される方がおられますが、一つにしていたくと有り難いです。

また、自分の手桶が見あたらないという苦情をしばしば耳にします。前回のお参りの際、どのあたりにしまったのかお忘れになる場合もあります。多くはお彼岸やお盆の混雑時に勝手に使われているケースのようです。所有者は片付ける場所がある程度決めていただき、当然ですが、他の方の桶を無断で使用しないようにしていただき、「西徳寺」の手桶をお使いになつて下さい。

プラスチック製(柄杓付き)一個 六千円

家紋・名入れ 一千円

木製(柄杓付き) 一個 一万三千元

家紋・名入れ 一千円

納期一週間～十日

(山崎哲記)

掲 示 板

平成25年3月

- 2日(土) 午後2時 評議員会定例役員会
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 3日(日) 午後2時 城北ブロック会間法会
(王子 北とぴあ)
- 5日(火) 午前10時 仏具磨き
- 7日(木) 午後4時 総代会
- 9日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 木村主任

- 12日(火) 午後7時 仏教青年会レクレーション
(寄席を楽しむ会)
- 13日(水) 午後1時 婦人会間法会
本山リーフレットに聞く「定まる方向」
- 17日(日)～23日(土) 春季彼岸会
- 22日(金) 聖徳太子奉讃会・本山特派布教・
春季永代経法要
布教使 永尾 道雄師
- 27日(水) 午後1時半 教行信証「信巻」に聞く(第86回)
講師 宗 正元師
- 30日(土) 午後5時45分 同行会修習式
「正信偈の教え」に聞く
山崎 哲
- 31日(日) 午後2時 中央ブロック会間法会
(湯島天神 梅香殿)

評議員会新年会

去る1月20日(日)、午後3時より西徳寺本堂におきまして、評議員会新年会が開催されました。来賓として総代会から4名、会員25名の参加のもと盛大に執り行われました。竹内乾一郎会長からは、来年30周年を迎える「でかけていく間法会」(五ブロック間法会)の記念事業に向けての抱負が語られ、今後の間法活動への協力が求められました。

その後、会場を上野・伊豆栄「不忍亭」に移して懇親会が開かれ、多くの方と賑やかに親睦を深めました。

(木村 専正 記)

混声合唱団「エコー」新年会

去る2月2日(土)に合唱団「エコー」の新年会が、ご門徒でもある「汀」にて開催されました。日頃ご指導をいただいている横山慎吾先生と金澤麻里子先生の他、来賓として酒井眞一総代にもご出席いただき、合計28名のもと楽しい時間を過ごしました。

また、会の後半では一人ずつご挨拶をいただきました。歌を通じて多くの方のお話が聞けて、非常に有意義な時間でありました。

(高橋 淳 記)

同行会新年会

1月26日(土)午後五時半より、18名の参加をもって同行会新年会が開催されました。

本堂にてお勤めの後、岸本住職からご挨拶を頂きました。場所を「梅檀の間」に移しての懇親会では会員同志、普段は見えない素顔に触れ楽しく過ごしました。最後に一人ずつ今年の抱負を語り、お開きとなりました。

(山崎 哲 記)

城東ブロック会

去る2月10日、市川八幡神社社務所におきまして、23名参加のもと、間法会を行いました。新しく参加された方、久しぶりに参加されたという方もおられ、また会員の逆井さん手作りのお汁粉を頂きながら聴聞させて頂きました。次回は6月30日(日)に人形町の香港美食園におきまして総会と間法会を行う予定です。皆様お誘い合わせの上でご参加下さい。(仲井 真裕 記)

編集後記

「循環彷徨」という言葉を聞いたことがあります。人間は砂漠や雪原で、自分の感覚だけを頼りにして歩くと、200メートル進むごとに5メートルずつ利き手の方向に逸れていき、終いには元の場所に戻ってくるといわれます。利き手の方向とは自分を信ずる心であり、いつの間にか目標を見失っていくことがあらわされています。

自分を信じて、納得のいくような生き方は、決して満足をうる結果にはならず、むしろ確かな依りどころを持たずに人生を空過していることを教えてくれる言葉です。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：<http://saitokuji.tobihiro.jp/>